

海外調査やフリーペーパーの作成など多様に FLP「国際協力プログラム」成果報告会

FLP「国際協力プログラム」の06年度成果報告会が昨年12月2日、8号館教室で行われた。03年度に始まった学部横断型のFLP (Faculty-Linkage Program) の定着と充実ぶりを物語って、この日の報告会では6つのゼミがパワーポイントを使って、1年間行ってきた多様な活動を発表した。FLPを広く知ってもらいたいという目的から公開形式で行われ、会場には新年度履修予定の1年生ら一般の学生の姿も見られた。

学生記者 植松歩美(総合政策学部4年)

外国人旅行者向け無料誌

【平澤敦(商学部助教)ゼミA】

ゼミでは、グローバルゼーションによって異文化交流が増大しているという視点から、「観光」に着目し、訪日外国人旅行者向けのフリーペーパー「TOKYO DISCOVERY」を作成準備中だ。フリーペーパーは、「無料で気軽に手に取れ、思い出として形に残すことも可能なので、旅行者に日本文化を伝える手段として有効だ」という発想から生まれたそうだ。

「TOKYO DISCOVERY」は、10

代から20代の外国人観光客をメインにした観光サポートという編集コンセプトで、主に個人旅行で短期滞在の観光客を対象にしているという。

これは、調査を通して、観光業界のマーケットサイズが拡大するにつれ、来日する外国人観光客も年々増加、その大半が個人で短期滞在型が多いという分析に基づいている。

発表では、実際に東京の下町(浅草・両国・築地など)と鎌倉、渋谷・原宿といった東京の観光エリアを取りあげた構想を紹介。今後は構想をもとにサンプル紙を作成し、国内外

の外国人にチェックしてもらったうえで、発行する予定だという。

【滝田賢治(法学部教授)ゼミA】

ゼミ生曰く「DS先生」——滝田教授の似顔絵イラスト入りのスライドで、今年度(昨年度)の活動内容を報告した。1年間を通して、多くのゼミ生に参加したゼミ生は、「他大学との交流は、自分たちにとって刺激になった」と語る。2年次の演習Aのみ開講している滝田ゼミでは、昨年の夏、中国の北京でフィールドワークを行った。

日本からの距離の近さとともに、

中国へのODA停止が議論されているという時事的な動きにも注目して、調査対象を中国に選んだ。フィールドワークのなかでは、北京大学で学生と交流を行い、盧溝橋などの歴史的な場所も訪問。「現在、調査をもとに、2万字に及ぶゼミ論を作成中」と報告した。滝田教授は、国際政治が専門のため、ゼミ生は対中ODAを中心に各自の関心に沿って論文を書き進めているが、期日が迫っているために、「笑顔が消えてきた」のだそうだ。

ベトナム、モンゴル……

【緒方俊雄(経済学部教授)ゼミA・B】

レスター・ブラウンの『エコ・エコノミー』を教科書に、持続可能な開発という概念を紹介した。現状を考慮せずに開発を進めるのではなく、生態と調和した、新しい経済を再構築することを目的とした概念で、具体的には、「市場に生態学的真実、言い換えると環境コストを反映させ

ることで、経済システムを再編することを指す」ものだという。発表のなかで、木材を例にあげて

少数民族のモン族と共に植林した。ベトナムは多民族国家だが、総人口のうち9割がキン族で、言葉や文化



の異なる少数民族との関わりは限られているそうだ。植林活動を通して、日本とベトナムだけではなく、キン族（ハノイ大学の学生）とモン族の友好を深めるとい

うのが、もうひとつの目的だという。実際に、「ハノイ大学の学生は最初に、モン族の人たちに話しかけようとしなかったけれど、植林を通して打ち解けていた」

この概念を説明し、その実践として昨年夏にベトナムで行った植林活動の報告を行った。現地では、「日越友好の森」で、ハノイ大学の学生、

とゼミ生は話した。【西端則夫（経済学部特任教授）ゼミB】

昨年夏モンゴルで行ったフィールドワークをもとに、作成中の調査報告書の内容について発表した。日本はモンゴルのトップ・ドナー国であるため、政治・経済的な結びつきが強いうえ、モンゴルが北東アジア地域において政治的にも重要な調査対象国としてモンゴルを選んだ。11人のゼミ生が、教育・企業・農

牧畜・国際関係という4つのグループに分かれて調査研究した。教育グループは、「モンゴル国における教育の現状」をザブハン県での調査をもとにスケッチし、企業に関心をもつグループは、モンゴルにおけるカシミヤ産業に着目した研究を行っている。農牧畜グループは、「市場経済に伴う農牧業の変容」を追い、国際関係グループはモンゴルの外交政策を分析するなど、モンゴルに関する包括的な調査報告書の作成を目指している。

【中田拓男（経済学部教授）ゼミA・B】

インドとフィリピン2カ国に分かれて、それぞれフィールドワークを行ったため、発表も2グループに分けて行われた。最初に発表したインド班は、「エントタイムメントによる開発アプローチ」を提唱した。発展途上国に暮らす人々は、インフラの未整備などの理由から、生活に最低限必要な衣食住を満たすために、大半の時間を割かねばならない。しかし、この時間を短縮することによって、農業生産の拡大や養鶏を行うため余剰時間をつくることが可能になる——そんなアプローチを検証するため、実際にインドのケララ州で行われているプロジェクトを調査したという。

フィリピン班は、フィリピンにおけるストリートチルドレンの問題が、なぜ改善されないか、という問題意識から出発。社会で意識化されることと、子どもたちのEQ（心内知性と対人知性）の成長が問題解決の重要な要素であるという認識から、PETA（フィリピン教育演劇協会）が行っている「演劇ワークショップ」

の効果なども検証した。

実際にフィリピンに留学していた学生が、「ストリートチルドレンの数はとても多いのに、このようなアプローチは有効か」と質問する場面もあり、活発な議論が行われた。

【中迫俊逸(商学部教授)ゼミB・C】

「Hello! every body...」と流暢な英語でスタートしたのは、国際コミュニケーションを専門的に学んでいる中迫ゼミだ。英語の挨拶のあとは、「ここからは日本語で」という発表者の言葉に笑いが起こる。

演習Cの4年生が、ゼミで学んだ異文化コミュニケーション理論の紹介と、鍛えた語学力実践の場として、シンガポールで行ったフィールドワークの成果について報告した。シンガポールでは、商工会議所やBluetooth(ワイヤレスデータ通信技術の一つ)対応商品をウェブ販売している「Excelpoint」や川崎汽船を訪問し、英語でインタビュー調査を

行った。また、シンガポールにおける労働者の現状や、賄賂の問題、教育制度など、幅広い分野での調査活動を報告した。

「スポーツ」プログラムも 期末交流会

FLP「スポーツ・健康科学プログラム」の06年度期末交流会も、ことし2月1日、多摩キャンパスで行われた。ゼミごとの活動報告のほか、外部講師による講演やポスターセッションなどもあつて盛況だった。

× ×

FLPは「環境」「ジャーナリズム」「国際協力」「スポーツ・健康科学」の4領域があり、学部を越えて1年次後期に行われる選考試験に合格すると2年次から履修できる。履修のためには、各プログラムごとに指定する講義科目群の中から20単位と、FLPが2年次から開設する「FLP演習A」(2年次)、「FLP演習B」(3年次)及び「FLP演習C」の12単位、計32単位の取得が必要になる。

学生記者募集

新入生 & 2年生

あらゆるジャンルの取材現場へ。マスコミに通用する取材力、文章力を鍛えます。

募集
人員

若干名

締め
切り

4月27日(金)

募集要項

作 ①私の好きなこと
文 ②ちょっぴり感動した話
(どちらかを選んで800字以内に)

中央大学『Hakumonちゅうおう』編集室
(編集担当：伊藤)

0426-74-2146